

Mamurogawa, reason for being.

雪国暮らし事典

山形県 真室川町





雪の下に 大切な宝物が 眠っている

かつての真室川は

山形の北のはずれの行き止まり。

冬には雪の吹きだまりとなって

訪ねくる者も稀だった。

新しいモノが入りにくい一方で

古いモノを大切に守り伝えてきた。

余所ではもう絶えてしまった

そんなモノやコトがこんなに沢山。

だから真室川の雪の下には

大切な大切な宝物が眠っている。

もう価値を失ってしまった。

そう思われていたモノばかりだけれど

これからの時代にも伝えていきたい宝物。

Mamurogawa, reason for being.

真室川が真室川であるその理由

その証し。

手から手へ

受け渡されてきた宝物。

1年かけて冬を迎える

そんな人々の営みの記憶。

誰かに受け継がれていくかもしれない

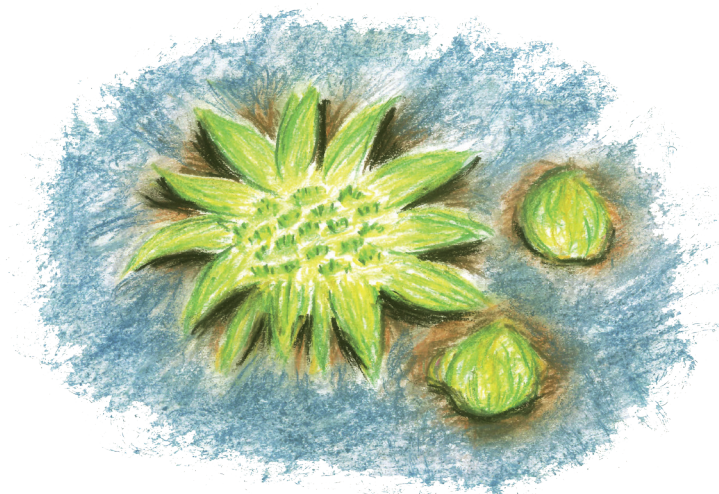
あるいは消えていってしまうかもしれない

けれど確かに今ここにある記憶。

Mamurogawa, reason for being.

僕らが真室川にいるその理由

その証し。





農業 特殊機械オペレーター 齋藤 賢人さん

saito kento

父はかつて出稼ぎをして家を守り、息子は高校卒業後に家業の農業を継ぎ、故郷で暮らしていくことを選んだ。

家業の農業を継ぐ決意を固めた息子・賢人さんに対し、父・政人さんは師となり、それまでに培ってきた米づくりの技術や経験、知識の伝承に力を注ぐようになる。そんな政人さんの思いに応えてきた賢人さんの剛毅木訥で静かな語り口や眼差しからは、父親や先人へのリスペクトを感じずにはいられない。

受け継ぐものと、伝えるもの

「遅かれ早かれ、家は自分が継ぐものだと思ってました」

そう語る賢人さんだが、結局のところその決断は早く、18歳の時に農業を始め、そのわずか1年後には政人さんから経営移譲を受けた。

親子ふたりで管理する水田は約13ヘクタール。そこで穫れる米は、ほぼ全てが風味に優れた良食味米に該当するという。

美味しいお米を作るためには、毎日あぜ道を歩き、稲の様子を見ながら水管理を細かく行う必要があるそうだ。

「そうやって田んぼと会話してい

るんだよ」と、政人さんが教えてくれた。減農薬で、あぜ道の除草も草刈りが中心という手間のかかる稲作も、田んぼとの会話があるからこそ成立しているのかもしれない。

果たしてふたりのお米はこれまで、世界大会で金賞を獲るなど数々のコンクールで華々しい結果をたたき出してきた。

師の薫陶を受けて結果を出してきた賢人さんが語る理想はこうだ。「自分の家を守って、死ぬまで釜淵で生きていく。そして、若い農業者と連携して、真室川に農業を残していきたい」

二人三脚で歩む道

家を継ぐ決断をした賢人さんが抱いていたのは、「長男だから」という使命感や諦観だけでなく、彼が子ども頃から親しんできた伝承芸能・番楽への思いだったという。

古くから鳥海山麓の村々で親しまれてきた番楽は、既に絶えてしまった集落もあるものの、真室川では今も3つの集落で盛んに営まれている。しかし彼が小学生だった頃には、彼の住まう釜淵の番楽は途絶の危機にあったという。

番楽の舞い手でもある父・政人さんの影響もあったのだろうか、

番楽のメツカともいわれる秋田県由利本荘市矢島の番楽に魅せられた少年・賢人さんは、すぐに学校の先生に番楽をやりたいと相談していたそうだ。

果たして彼が小学3年生で番楽の担い手になった時、釜淵には「獅子舞」の演目しか残っていなかった。それが賢人さんの登場で俄かに活気づき、立て続けに2つの演目が復活し、今では8つの演目が執り行われるまでになった。

そして、彼が初めて演じた「子ども口上」は釜淵番楽の伝統になりつつある。子ども達が熱心に練習する姿も見られるようになった。

「なくすのは簡単。残さないといけないし、自分がやつていけば釜淵から番楽はなくなるらないと思うんですよね」

そう語る賢人さんの舞には、観る人を惹きつける華がある。

二人三脚で歩む米づくりの道は、暮らして文化の伝承へと真つすぐに延びている。



番楽を舞う賢人さん(上)と政人さん(下)

齋藤 賢人さん

真室川町生まれ。高校卒業後に真室川に残り、家業の農業を継ぐことを決断。就農2年目の19歳のとき、父の政人さんより経営移譲を受ける。以後、二人三脚の稲作が始まり、政人さんと共に良食味米の栽培技術に磨きをかけている。米づくりを基盤として、夏は無人ヘリ、冬は除雪車のオペレーターとして三足の草鞋を履いている。第19回米食味分析鑑定コンクール世界大会金賞(平成29年)、第18回山形県産業用無人ヘリコプター飛行技術競技大会最優秀賞(平成27年)など受賞多数。米の他に、約4haで大豆を栽培している。

父と息子
ふたりで挑む
米づくり

移住を考えている人への
メッセージ

農業は一人で作業することが多いですが、農家同士のつながりや助け合いこそが農業を魅力的にするとおもいます。一緒にチャレンジしませんか？



美容師
布目 英子さん

numome hideko

布目 英子さん
静岡県浜松市生まれ。都内の美容専門学校を卒業後、スタイリストとして都内の美容室に11年間勤務。2000年に真室川町に移住し、結婚相手の実家に入居。同年、御主人と共に hair SURE を開業。3世代同居。趣味は旅行。

雪は大変だけど、
人が温かくて
すぐに町に
溶けこめました

東京の有名美容室に勤めていた布目英子さんは、同じ職場の真室川町出身の男性との結婚を機に、2000年に町に移住した。以来、ご主人とお義母様との3人で美容室を営まれているほか、2児の母としても家庭を切り盛りしている。

移住に不安はなかった

「主人が一人っ子でしたので、結婚を決めたときには真室川への移住もご両親との同居も決まっていたました」

静岡県出身の英子さんは、できれば子どもは自然の豊かなところで育てたいとの想いもあり、真室川に暮らしの拠点を移すことに躊躇や不安はなかったという。

「どんなところだったって仕事ができると思っていましたから」

高校3年生の時に、「手に職あれば」と美容師を志すようになったという英子さん。有名美容室に勤めるなかで腕一本で生きていく覚悟も自信をも身に付けたのだろうか、にこやかに笑う瞳の奥に、自分の人生を軽やかに切り開いて

きた人の強さと柔らかさを感じられた。

町の良いところ悪いところ

町での暮らしで困ったことなどを訊くと、挙がってきたのはどれも「雪」に関連したことだった。

「はじめは慣れていなくて、雪の扱いが大変でした。今でも雪道の車の運転が怖いです」

「毎日の雪かきが大変なのはやっぱり憂鬱ですね」

温暖な静岡や東京で暮らしてきた英子さんにとって、やはり真室川の雪は一筋縄ではいかなかったようだ。逆に真室川での暮らしの良いところを訊くと、こんなことを挙げてくれた。

「四季がはっきりしているので、季節ごとの景色を楽しめること、伝承野菜や山菜など食べ物がおいしいのは都会の人にも自慢できます」

「閑沢の新真室川温泉が大好きです。職業柄、東京時代は肘まで手荒れがあつて悩んでいましたが、閑沢温泉に入つて治つてしまったので今も毎日通っています」
雪がもたらす湿度のためか、ひ

どかった花粉症もやわらいだという英子さん。心身ともに充実した暮らしを実現できているようだ。

真室川の子育て事情

子育て中の英子さんだが、母としても「良い時期に子育てが出来ている」と感じている。子どもの成長にあわせるように、こども園が開園したり医療費が無料化されたりなど、タイミングよく少しずつ町の環境が整っていると感じているからだ。

個人的には、子どもにはのびのび育つて欲しいと願っている。

「親がこうしなさいと言うのではなく、自分でやりたい事を決めて進んでいって欲しいと思っています。子どもにも個性がありますから。習い事も本人がやりたいというのをさせています」

子どもの習い事には車での送迎が欠かせないが、布目家では、同居の義父義母も含めて家族全員でサポートしている。



移住を考えている人へのメッセージ

自然が豊かで、温泉があって、ゆっくり過ごせる町です。自分の時間をもてる余裕が欲しい人におすすめです。四季がはっきりしているのでその移ろいを楽しめます。最初の5年は雪に喜べます(体験談)。



農業 わら細作家

高橋 伸一さん

Takahashi shinichi



子どもやお年寄りまで、多くの人から「伸ちゃん」と呼ばれ親しまれている高橋伸一さん。

スーパードキュメンタリーとして町の先進的な取り組みに従事してきたが、40歳の区切りに退職して、農業とわら細工を生業とする道を選んだ。

真室川以外では暮らしたことがない、という伸一さん。井の中の蛙は、海の広さを知らないかわりに空の蒼さを知るとも聞く。本稿では、伸一さんが見ている「真室川の空の蒼さ」に迫ってみたい。

真室川は私を作ったすべて

「伸一さんにとって真室川って何？」と意地悪な質問をしたところ、返ってきたのは「私を作ったすべて。じゃないかな」というちよつとカッコいい言葉だった。

「古いものがいっぱい残っているし、伝承文化の里。よそではなくなってしまった古いものを大切にしてきた吹きだまりのような町。変わったことをしている人も多しね」と解説してくれた。

古いものが残っている町がどのように伸一さんを形作ったのかについては、彼の公務員時代のエピソードに触れる必要がある。民俗学研究家の結城登美雄氏が提唱する「ないものねだりから、あるもの

の探し」の教えに感化された伸一さんは町に当たり前にあったものの魅力に気づいていく。あるもの探しで何をみつけたの？と訊くと、これにもカッコよく「自分を見つけた」と返してきた。

彼が生まれ育った家は稲作と繁殖牛でお金を得て、有畜循環型の少量多品種栽培農業で得た野菜で自給しており、昔ながらの風習を大切に守り伝えてきた。古い真室川の風習・風俗・慣習を暮らしの中で実践してきた自分は、真室川そのものの人だと感じたというのだ。

それ以降伸一さんは、「見つけた町の魅力を後世にしっかりと継承させたい」との想いを持って仕事に邁進するようになる。

やらなければならないことが目の前にあった

ではなぜ公務員を辞めて、農業とわら細工の道を選んだのか。

町の魅力的なものを磨き上げて発信することで、新しい担い手に繋げることができるとは期待していた伸一さんだが、現実はずいぶん多くの手が「私の代で終わりだ」と諦めてしまっていて、なかなか継承に繋げることができなかったという。



それでも最後までやり切りたいと願っていたものの、公務員の定めか、違う分野の業務に従事しなければならなくなったことで、改めて自分の役割について考えたそう。

「やらなければならないことがすぐ目の前にあるのに、それができないのは自分の人生がもったいないと思った。自分が必要とされることをしたいなと思ったし、自分が継承していけばいいんだって気が付いた。それに、自分だから継承できるという自信もあったし。」

辞めてからのことはあまり考えずに役場を飛び出したという伸一さん。いつかは継ぐと思っていた農業もあったので、なんとかなると思ったそう。しかし何よりも、「今やらないと取り返しがつかなくなる」との危機感が強かったという。

高橋伸一さんはこれからも、農業やわら細工や日々の暮らしのなかで、未来へと続く真室川の魅力の糸譜を編み続ける。

移住を考えている人へのメッセージ

たった一度の人生です。実りある人生にするには自分が輝けるステージが大切です。豊かな暮らしのある真室川は、貴方が輝くステージになれるかもしれません。

高橋 伸一さん

真室川町生まれ。新庄北高等学校を卒業後、真室川町役場に勤務。伝承野菜の発掘や地域ブランドの立上げ等に携わる。2016年3月で退職し、家業の農業に従事。わら細工の製作販売や技術継承を行う工房ストローを主宰。趣味は自然散策や図画工作、料理。

平凡な
今の暮らしを
続けたい





行政書士
小松 由美さん

komatsu yumi

小松 由美さん
真室川町生まれ。成城大学法学部を卒業後、専門学校に通い行政書士資格を取得。真室川町にUターン後、小松行政書士事務所を開設。主に、民間企業の行政手続きのサポートを担っている。仕事のモットーは「ゆっくりでも丁寧に、確実に」。令和元年度真室川音頭むすめとして、町内外のイベントで町をPRした。趣味は読書と映画鑑賞。

豊かに、
心のゆとりを持って
暮らしたい

2016年4月に東京からUターンした小松由美さん。地元・真室川で行政書士事務所を開業し、地域の民間企業が滞滞なく事業を実施できるようサポートを行っている。

行政書士として地域を支えたい

「東京の大学に進学した時、じつは親から帰ってこなくていいよって言われていたし、自分も漠然と東北圏内で仕事できればと考えていたんですよ」

そう打ち明ける由美さんは、東京で行政書士としてのキャリアを築いていくことを意識したこともあったものの、結局生まれ故郷に戻ることを選んだ。

「高級住宅街にあった大学キャンパスは落ち着いた雰囲気でも居心地が良かったのですが、東京のリズムは合いそうになかったですし、最後は家族の応援もあって地元でチャレンジしたいと思いました」
ご両親のサポートも得て実家の一角に事務所を構えた由美さんは、新庄市でいちばんの行政書士に教えを乞いながら、県内最年少

行政書士として着々とその地歩を固めているように見える。

そんな由美さんが自らのキャリアを決めたきっかけは、高校1年生の時に観た、検察官や検察事務官が活躍するトレンドードラマだ。

「キムタクが格好よかったし、こんな仕事があるんだと気になって」

そう語る由美さんには、地域の方々と触れるうちに気づいたことがある。司法書士や社会保険労務士の資格を取得すればまた違った角度から困っている人のお手伝いができるのではないかと。新しい夢をはにかみながら語る由美さんもまた格好よく、頼もしい。

故郷で実現したい暮らし

帰ってきてから若者が少なくなっていることに気が付いたという由美さん。そんな故郷・真室川に寂しさを感じる一方で、「都会の冷たい人間関係が嫌だったのに、田舎の人間関係も大変だと気が付いた」「風通しが良くなるのもっと住みやすくなるのにな」と笑う。

真室川でどんな暮らしをしたか？と訊くと、子どもの頃に野山で遊んだエピソードを挟みながら「仕事が忙しくても休日もしっかり休んで、自然のあるところで豊かに、心のゆとりを持って暮らしたい」と語ってくれた。将来は、自分が育ってきたようにのびのびと自然の中で子どもを遊ばせたい、とも。

自分がまだ気づいていない、地域の美味しい食べ物、風景、伝統行事に出会えるのが楽しみという由美さん。町の好きなのところは、食べ物美味しいこと、四季折々の風景が楽しめること、（それでもやっぱり）人が優しいことだ。



移住を考えている人へのメッセージ

（真室川の人は）恥ずかしがり屋が多くて最初は難しいけど、いったん打ち解けると心安く優しく接してくれると思います。

フランス料理店オーナーシェフ

小松 秀文さん

komatsu hidehumi

真室川町のファン代表



左：藤山富二夫さん 中：藤山梅子さん 右：小松秀文さん

あまり手を加えず、素材そのものの味で 美味しいと言ってくれる



シェフの手により成仏した山菜

シェフ・ボンは、開業後5年間はピストロ料理店として営業していた。「ランチではカレーやポトフ、パスタなどを提供し、地元食材を扱ってはいいたものの、産直に置いてあるものを買ってくるだけでした」正統的なフレンチで勝負できるか不安もあったし、コース1つを山形食材で揃えられるようになってから「山形フレンチ」を掲げたいとの思いがあったという。

そんな小松シェフが、真室川の農家・藤山梅子さんと出会ったのは、今から14年前の2006年のことだった。「そろそろ産地訪問したいな」と思っていた小松シェフに、同店を鼻肩にしてくれてきた地元テレビ局アナウンサーが引き合わせてくれたのが梅子さんだった。

梅子さんは冬期間、御主人の富二夫さんと二人三脚で町特産の「雪うるい」や「山うど」などの促成山菜の栽培に取り組んでい

る。梅子さんの明るく屈託のない話しぶりに惹きこまれたシェフだったが、シェフが料理した山菜を口にした梅子さんが発した言葉に衝撃を受けた。

「うちの山菜も成仏したな！」シェフにとっては最大級の褒め言葉だったのだろう。「お客様の口に入るところまで考えて作っている農家さんがいるんだ！」と気づいたシェフは、これ以降、生産者との縁づくりに邁進していくことになる。

作っている人と一緒に味が素直

雪うるいに、山うど、タラの芽、伝承野菜の赤にんにく、甚五右エ門芋、勘次郎胡瓜、今朝治郎胡瓜、とっくりかぶ、最上かぶ、それに高橋伸一さんの野菜たち。シェフ・ボンで取り扱う食材のなかでも、真室川の食材の多さは群を抜いている。

「最初に回ったのが真室川だったから」という小松シェフだが、真



室川の食材をこのように評する。

「作っている人と一緒に味が素直。普段野菜嫌いな子どもが美味しいと言ってくれる」

真室川の、そして県内の食材を扱うようになって料理も変わってきたという。

「以前は野菜はお肉の添えものでしたが、今では主役にもなるし、素材そのものの味を活かすためなるべく手を加えないようにしています」

そんな小松シェフの夢はこの14年間で出会った生産者全員を呼んでパーティを催すこと。山形食材と出会って成長した自分の料理を、いつもお世話になっている生産者みんなまで分かち合いたいと願っている。



小松 秀文さん

山形市生まれ。千葉、東京、フランス、仙台のフランス料理店にて修業したのち、2004年に独立開業。2009年に満を持して「山形フレンチ」を掲げた。シェフ・ボンでは「三身全幸」のコンセプトを掲げ、「御客様」、「生産者様」、「シェフ・ボン」の三者全てが幸せになることを日々考えて営業されている。またシェフは、会いに行く(会わないと扱わない)・浮気しない(同じものは他の生産者から買わない)・値切らない、のご自身のポリシーを持って産地を訪ね歩いている。趣味は最近行けていないゴルフとゴルフ。

●山形フレンチ シェフ・ボン 天童市桜町12-8 TEL.023-651-9533

移住を考えている人へのメッセージ

真室川の人はピカイチで人が良いので安心。でも、人見知りが多いので、自分で働きかけないと最初は難しいかも…
伝承野菜をはじめとした町の食材に対して、行政の力の入れ方が山形でもトップクラスです。だから私も安心してこれからもお手伝いしたいと考えています。

真室川ってこんな町

まむろがわ

●人口:7,336人(令和元年10月1日現在)
※令和元年山形県の人口と世帯数より

●高齢化率:40.8%

●総面積:374.22km² ●森林率:86.4%

●8月平均最高気温:28.8℃

●2月平均最低気温:-4.3℃

●町なかの平均最深積雪量:136cm
(令和2年3月までの20年間の平均)

山形県 真室川町

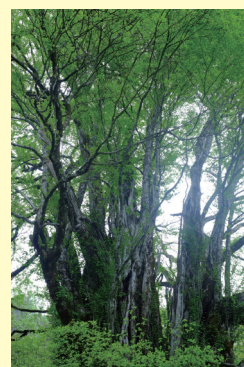


森

古くより林業で栄えた真室川町は、広大な山林を背景に、今も最上地域最多の9社の林業事業体が操業しています。



苗づくりから、植林、伐採、製材、バイオマスチップや発電用ブリケットの製造まで、域内で森林資源が循環する希少な地域です。真室川町歴史民俗資料館(真室川町大字新町233-1)では真室川が林業が主産業だった時代の風物を展示しています。



林野庁指定の「森の巨人たち100選」に「女甕(めこしき)山の大カツラ」と「滝の沢の一本杉」が選ばれている他、深山幽谷な森林のそこかしこに桂や黒檜(クロベ)などの巨木が佇み、樺(ぶな)の二次林が広がっています。

食

雪国の暮らしは自然や巡る季節との距離が近い暮らし。食もまたしかり。



郷土食には、厳しい冬を乗り切るための知恵が詰まっています。雪国・真室川の「食」を紹介するのが「娘に伝えたい郷土食 あがらしやれ真室川」。郷土食の保全・継承に取り組む団体と町がコラボして生まれた、郷土料理のレシピ本です。食にまつわる風習や食材の解説まで盛り込み、これ一冊で真室川の多くを語り尽くします。2010年、初版発行。農林水産省フード・アクション・ニッポンアワード2015入賞。



山菜王国山形のなかでも特に真室川・鮭川一帯の山菜は品質が高いことで有名。原木なめこの発祥の地とも知られ、深い雪や少ない日射量等の気象条件が山菜やキノコの

生育に適しているようです。冬の農業として、ビニールハウス内での山菜の促成栽培も盛んです。

主な農業生産物:米、ネギ、ネギ、里芋、やまがた雪やさい(人参、キャベツ、大根、白菜)、促成山菜(タラの芽、山うど、雪うり)、和牛(繁殖および肥育)

伝

街道から外れた真室川は雪国の北の行き止まり。新しいものが入りにくい一方で、あるものを大切に守り伝えてきました。真室川は伝承文化の里です。



農家が自給用の野菜として自ら採種し伝えてきた在来種が17種。最上地域で多くの伝承数を誇ります。



鳥海山の山麓一帯で伝承されてきた伝承芸能・番楽。途絶えてしまった集落もあるものの、今も、平枝・釜淵・八敷代の3つの集落で受け継がれています。



ユニークでどこかユーモラスな風習が今も暮らしの中に息づいています。たとえば平枝地区の「やまいぼい」。集落に病や災いが入ってこないように、わら細工に集落を守らせます。

真室川の取り組み

まむろがわ

住まい

- ① **新築・購入・建て替え 補助金**
工事の5%(上限50万円)を補助。
→窓口は、建設課
- ② **リフォーム 補助金**
工事の10%(上限12万円)を補助。
移住世帯、子育て世帯、新婚世帯には
上乗せ[補助率20~30%(上限30
~40万円)]があります。
→窓口は、建設課
- ③ **ソーラー発電設備設置 補助金**
設置に要する経費の10%(上限20万円)
を補助
→窓口は、町民課
- ④ **バイオマス暖房設備設置 補助金**
薪ストーブ/ペレットストーブの購入および
設置費用の3分の1(上限10万円)を補助
→窓口は、町民課
- ⑤ **空き家バンク**
町では空き家情報を公開している他、
空き家の所有者と利用希望者との橋渡
しを行っています。
町ホームページをご覧ください。
→窓口は、企画課



起業・開業支援

- **空き店舗活用支援 補助金**
町内の空き家や空き店舗を利用し、
飲食店や宿泊業、製造業などを営もうと
する方に対し、リフォームの工事費や
設備費、備品購入等の補助対象経費の
50%(上限150万円)を補助しています。
→窓口は、企画課

各事業の詳細は町ホームページでもご覧いただけ
ます。その他、国や県と連携して実施してい
る施策もあります。詳しくはお問合せください。

<https://www.town.mamurogawa.yamagata.jp/>

真室川町移住相談窓口



真室川町役場 企画課内
TEL.0233-62-2111



町ホームページ
QRコード

子育て

- ① **医療費無償化**
0歳児から高校生相当年齢まで医療費
を無償化しています。
→窓口は、町民課
- ② **保育料無償化**
● 3歳~5歳児
国の保育料無償化に加え、副食費も
完全無償化
● 3歳未満児
国の保育料無償化になっていない
3歳未満児についても、副食費を含む
保育料の半額(3人目以降は全額)
を町が負担しています。
→窓口は、教育課
- ③ **乳児の家庭保育支援 給付金**
満1歳に満たない乳児を家庭で保育し
ている保護者等に対し、乳児1人あたり
月額3万円を給付しています。
→窓口は、教育課



教育

- ① **公営塾による進学支援**
● 小学5年生~中学3年生のうち、
英語検定2級~5級の受験希望者
を対象に、テキスト代のみ自己負担
で週1回の講座が受講できる他、
受験料も助成しています。
● 算数や数学の基礎向上を目的に、
小学校5年生~中学3年生の希望者
を対象に、春休みや夏休みの長期
休業中に集中講座を開講しています。
 - ② **副教材無償化**
● 小学生と中学生を対象に、学校で
使用する副教材(ドリル、テスト、
副読本、図工や家庭科の実習用
教材など)を無償化しています。
 - ③ **ふるさと給食**
● 地元の食材や料理への理解を深める
ため、また給食の質を高めるために、
普段の給食について1食あたり25円
を町で負担しています。
● 年に3回は、特に食育推進の観点から
1食あたり更に300円を町で負担し、
町産食材を使った給食を提供しています。
- ①~③ → 窓口は、教育課





Mamurogawa, reason for being.

雪国暮らし事典

発行：真室川町移住定住推進協議会

〒999-5312

山形県最上郡真室川町大字新町 127-5

真室川町役場役場 企画課内

TEL.0233-62-2111 / FAX.0233-62-2731

Writing / Photograph

移住定住コーディネーター 梶村勢至

Design / Illustration

真室川町地域おこし協力隊 佐藤萌以

■発行年月：令和2年4月